

転生したのでせっかくだから対戦車道をやってみようと思う

倒錯した愛

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

すまない、また転生系妄想小説なんだ。

深刻なツキトニキ酷使、使い易いからね、仕方ないね。

続かないと思うけど、とりあえず投稿しとく適当スタイル。

対戦車道……………それは、紳士の嗜み、漢達の青春、泥と汗と硝煙にまみれた戦場。

受講者は主に男子。

彼らは、特殊カーボン素材を編み込んだジャケットと装甲服に身を包み、バトラーシテムを装着して戦場へ臨む。

地滑りしながら近づいてくる数十トンある鋼鉄の怪物に肉薄し、対戦車兵器と自らもてるあらゆるモノを以って、戦車とその搭乗員を行動不能にする。

元受講者は口にする。

曰く、狂気の沙汰だ、と。

曰く、正気ではいられない、と。

そんな、現代では衰退した対戦車道に、チート野郎が扉を蹴破って入ってきた。

平穏な世界に転生……………と思ったら戦車で戦うスポーツだって!?しかも戦車を生身で倒す対戦車道なんてものまであるなんて、なん

てことだ！

最高じゃねえか！（b y ツキト改め、ジョージニキ）

戦闘狂（戦争狂でもある）の変態糞転生者が、ガルパン世界で、対  
戦車兵器片手に両手に大暴れ！G u P キャラに明日はあるか!?

## 目次

留学して強豪校の女の子と友達になる	1
練習試合をするようで	7
知恵を借りて作戦会議を	17
くじ引き作戦	24
練習試合開始!	29
試合、終了!	45

## 留学して強豪校の女の子と友達になる

く英国騎士は無限軌道と共にく

打ち付ける波の音を聴きながら、私は海の近くの公園のベンチに座っていた。

しばらくして、どこかの学校の女生徒がやって来て、同級生ということもあり、話しているうちにいつの間にか会話に没頭していた。

「センシヤ、ミチ?」

「せんしやどう、戦車道、こう書いて……センシヤドウ、つて言うんだよ」

枝木で地面に書かれた達筆な漢字とひらがなとカタカナを見る。

せんしやどう、せんシヤドウ、センシヤドー……うむむ。

「センシヤドウ……ふーむ、聞いたことがないな」

どう聞いても……前世の記憶になかった。

「えっ? 全国大会とかやってて、結構メジャーだと思ったんだけど……」

西住、西住みほは物知りで助かる、転校したての私にいろいろと教えてくれる、良い人だ。

人口が増えすぎた、とか様々な理由で人が陸地を離れて海の上で暮らす世界。

人々は学園『艦』と呼ばれる巨大な船で、その一生を謳歌する。

学園艦には、生活に必要なものが揃っており、『無い』モノは『無い』と言える充実ぶりだ。

コンビニに始まる商業施設の大半、スーパー銭湯、教育施設、役場、必要な設備はしっかりと設置されていて不自由はない。

それでも目当てのモノや店が無い場合は、通販で頼むか定期的に陸地に接岸するときに下船して買い物をすればいい。

と、西住は教えてくれた。

「うーん、イギリスではあんまり盛んじゃないのかな?」

「私はインドア派だから、きつとそういうスポーツについて耳にする

機会が無かったただけかもしれない」

「インドア派なんだ、趣味は何かな？」

「日本のアニメの鑑賞や、ボードゲームをしている」

「へえ、どういうアニメ？」

「ボコられグマっていう……」

「ボコ見てるの!？」ガタツ

いきなり立ち上がったかと思うと、身を乗り出して来た、だいぶ興奮している、そんなにボコが好きなのか？

「ああ、最初は何の気なしに見ていたんだが、なんだろうな、こう、『never give up』の精神を強く感じたんだ」

「うんーうんー！ボコは何度ボコボコにされても、挫けずにボコボコにされ続けるんだよね！」

酷いセリフだ……実は西住はかなり恐ろしい人物なのでは？

と、西住がボコについて熱く語り始めたところで学園艦出港30分前の汽笛が聞こえて来た。

『黒森峰の生徒は、ただちに……』

「あつ！もうすぐ出ちやう……」

「残念だ、もう少し聞きたかったんだが……」

「うう、せつかくボコ好きの人と会えたのに……」

ガクツと肩を落とす西住、どうやら西住の周りにはボコ好きはいないようだ。

「連絡先交換しておこうか？」

「え？いい、いいんですか？さつき会ったばかりなのに」

「何を今更……もう友達だろう？」

「友達……」

何やら嬉しそうな様子の西住、黒森峰とやらには友達がいなかったのか？

あれ？涙が……。

「いや、ボコ仲間というのも捨てがたいな」

「ボコ仲間……じゃあ私たちはボコ友達ですね！」

「ボコ友達……語呂がいいな、よし、今日からボコ好きの友達とし

て、よろしく頼む西住」

立ち上がって右手を差し出す。

「はい！えっと、クアーライ……………」

「ジョージ・カーライルだ、カーライルでもジョージでもいい」

「よろしくお願いしますね、ジョージさん！」

「よろしく、西住」

差し出した右手を握り返され、そのまま上下に軽く振って、解く。

「帰ったらメールしますね……………わわっ」

学園艦に向けて走り出した西住は、石につまづいて転びそうになっていた。

「気をつけて帰るんだぞ？」

「あはは……………はい、わかりました、それではまた」

そう行つて今度こそ走り出して行つた、公園を出て少ししたら西住の姿は見えなくなった。

「さて、私もそろそろ行くか」

イギリスから交流目的での日本留学、前世では第二の故郷であった土地だ。

まあ、今世では土を踏むことは少なそうだ、何せ私のこれから通う高校は、西住同様に船の上、学園艦なのだから。

「大洗学園の学園艦の寄港時間は……………むっ、1週間後？だが定期便の小型船舶での接近なら……………それも無理？どこの海域に出てるんだ？」

1週間かかるほどの遠洋航海をしているのか？留学生が来てるというのに、スケジュールの調整くらいしといてほしいものだ。

「まあ、1週間くらいなら、近くの宿に事情を話せば無料……………とまではいかないでも、格安で滞在はできるはず」

手持ちは、まあそこそこある、きつと大丈夫なはずだ。

日本での友人第一号も無事できた、戦車道とかいうスポーツについても知れた、なかなか楽しくなりそうだ。

大洗学園のOBだという民宿の宿主に事情を説明すると、それなら、ということでも部屋を貸してくれた。

もちろん、無理を言っている立場なので食事などは払わせてもらうことにした、学生だから……と渋い反応だったが、対価しっかり払わなければいけない。

とは言ったが、本来の半値ほどの格安で食事を提供されてしまった、にこやかな宿主の顔が脳裏に浮かんでいる。

そんな、とても気前のOBが営む民宿に泊まって、すぐに1週間経った。

感謝を述べて別れ、接岸した大洗学園の学園艦に乗船する。

「イギリスから留学に来たジョージ・カーライルです、大洗学園の教師の方が迎えに来ているはずですが……」

乗船してすぐの受付にそう言うと、応接室にいるとのことを通された。

「初めましてジョージ・カーライルさん」

「初めまして、あなたが大洗学園の教師の方ですか？」

「はい、そうです」

来ていたのは女性教師だった、

「よろしく願います」

「はい、よろしく願います……さっそく説明にうつります」

ね………カーライルさんは当校についてご存知でしたでしょうか？」



「いいえ……………日本は初めてでして」

「では当校について説明しますね、当校は2年前まで女子校でした、しかし入学希望者が減って来ている現状では学園艦の経営や存在意義に関わりますので、急遽共学校としての整備を整え、男子生徒受け入れを行なっているのですが……………やはり、女子校として長かったというのもあって、男子生徒は全体の20%もない状況です」

思った以上に過ごしにくい環境のようだ、なんてこった。

「そこで、外国からの留学生等を積極的に受け入れる運動を始め、共学校としての新しい大洗学園を広めている、という感じですね」

「その運動で来た留学生第一号が、私だと?」

「はい、来てくださってありがとうございます、当校はあなたのいた学校と比べると貧乏……………備品が古いものが多いので不便を感じさせるかも知れませんが、そういう時は、『これがあつたほうがいい』、などの意見を生徒会に提出していただければ、改善に努めてくれるはずですよ」

「わかりました、これからよろしくお願いします」

設備以外で無くて困るものは大体買えるから良い、設備で困ったら生徒会に行けばいいか、さすがにトイレがないことはないはず……………だよな?

「生活に関しては、学生用の男子寮を使ってください、女子寮には入らないように注意して下さい」

「ええ、気をつけます」

男子寮の鍵を受け取る、楽しくなりそうだ。

ジョージ『無事に学園艦に入れた』

西住『よかったです、友達はできましたか？』

ジョージ『すまない、まだ学校は見てないんだ』

西住『そうなんですか。じゃあ、選択科目はどうするんですか？』

ジョージ『いろいろあるが、パンフレットに小さく載ってた【対戦車道】をやってみようと思う』

西住『対戦車道ですか!? 大変だと思いますよ？』

ジョージ『人もいないみたいだし、そうなんだろう。とりあえずやってみて、ダメなら他のにする』

西住『それがいいかも知れませんね。そうだ、来週の土曜日に戦車道の全国大会の決勝戦があるんですけど、見に来られますか？』

ジョージ『大丈夫そうだ、でも入って大丈夫なのか？』

西住『あつ、そうでした。入場券を送りますね、明後日には届きます』

ジョージ『ありがとうございます、絶対に見に行く』

西住『無理はしないで下さいね（汗）』

ジョージ『大事な友達の試合なんだ、多少の無理があつたとしても見に行こうとしたさ。今回は本当に何も予定はない無い』

西住『ありがとうございます！』

ジョージ『しっかり応援させてもらうよ』

西住『応援に応えられるように、最高の試合をお見せしますね！』

## 練習試合をするように

『間違ってたのかな？』

「むう……………」

戦車道……………」

西住から届いた入場券で決勝戦を見に行った。

こつちに来てから久しく忘れていたナニカの炉に火が灯ったように感じ、思わず全身が粟立ち闘争に身を投げ出したくなったものだ。

テンションが最高潮に達する決勝戦終盤、追い込まれた西住の姉率いる黒森峰のフラッグ車、その前方にいたIII号戦車が操縦ミスからか、それともフラッグ車であるティーガーに後ろから追突されたか、はたまた雨で地盤が緩んでいたのか、III号戦車はその乗員もろとも川に落ちてしまったのだ。

フラッグ車の車長だった西住は、乗員を助けるために、ティーガーから飛び降りて川に沈みゆくIII号戦車へ。

指揮できる人間がいなくなったティーガーは敵前で無防備に、逃げ道もない崖道、敵はロシア被れのプラウダ高校、ドイツ車中心の黒森峰に対しソビエト車中心、無情にもフラッグ車を討ち取られた。

人命救助をした西住には多くの賛同があったが、西住の家と黒森峰の戦車道チームは否定した。

西住の家は戦車道の名家、その娘があまつさえ公式試合で逃げるようなことをしたとして。

黒森峰の戦車道チームからは10連覇のかかった大事な試合でわざと負けるようなことをしたとして。

西住は家族に自分の行動を否定されたうえ、身近な人間からは恨まれるようになり、非常に生きづらくなってしまった。

鬱屈とした日々を生きる西住に、なんとメールを送ったものか……と考えている時にきたのが、冒頭のメール文。

『間違っではないが、助けに行く前に他の搭乗員に任せてからでもよかつたかもしれない』……………少し冷たいかもしれんが、これで送るか』

この問題、なんてこともない初步的なことをやってないだけだった、助けに行くなら行くで他の人に車両を頼んでから行けば良かったのだ。

試合中に戦車が滑り落ちたんじゃ冷静ではいられないだろうが。

『電話してもいい?』

電話か、時間は………休み時間はまだあるから大丈夫だな。

『どうぞ、あいにくジョークはうまくないが』

メールを送ってすぐに電話がかかってきた。

《も、もしもし、ジョージ君?》

「ハロー、西住」

おどおどしたいつもの西住の声だった、だが無理やり押さえつけているようだった。

《あ、いきなり電話してごめんね?》

「気になるな、友達にはいつでも電話して良いものなんだぞ」

《そ、そっか………ねえ、ジョージ君》

さっきまでのほんわかした口調は消える。

《ジョージ君が、あのフラッグ車の車長だったら、どうしてた?》

「私が?………そうだな、I-I-I号戦車が落ちたら、他の搭乗員、例えば砲手が装填手に後を任せて川に飛び込むだろうな………時間には猶予があれば、後方に下がってから他の車両の搭乗員を数人ほど回してもらって、役割分担して救助していただろう」

《そっか、うん、メールでも言ってたしね………ジョージ君、私って、戦車道向いてないと思う?》

「学校のメンツやI-O連覇の栄光、家の人間の言いつけe t c………そんなものより、人命を優先した西住が戦車道に向いてない?バカを言うんじゃない、戦車道が安全にできるのはなぜだと思う?」

《え?えっと、それは戦車に特殊カーボンの内張り装甲が張つてあるからで………》

「違う、間違ってるぞ西住、その答えは0点だ」

《ふえ!?》

「戦車道が安全にできるのはな西住………お前みたいな優しくしてす

「ごいやつがいるからだ」

《わ、私が？》

「そうだ、西住のように名誉や栄光よりも優先して人のために動けるやつは少ない……………わかるか西住？お前はすごいやつだ、すごいやつなんだ……………誰にもできなかったことを、お前はやってのけたんだ」

《でも、でも私……………ぐすつ》

「泣くじゃねえよ……………お前のことは俺が認める、お前のやったことやっちまったこと、全部俺が認める……………お前が誰にも認められなくても、俺はお前を認める、俺はお前がすごいやつだつてことを知っている男だ」

《ジョージ君……………》

「何かあつたら、今みたいに相談してくれ……………ボコのことだけじゃなく、日常のことでもいい、メールしたくなつたらメールして、話したいことがあつたら電話をする……………それが、友達だろ？」

そこからは大変だった、熱くなって口調もキャラも忘れていろいろ言ってしまったのもそうだが、わんわん泣き出した西住を宥めるのにだいぶ時間を食い、結局放課後まで電話していた。

もちろん怒られた、留学そうそう授業бойコツトをしてしまうとは……………。

だが良いことはあつた、それから西住はいろいろなことでメールや電話をしてくるようになり、大洗学園での退屈な生活に新鮮で優しい風を入れてくれたのには感謝している。

ボコについてのことはもちろん、日常での何気ないこと、その日の授業でわからなかった問題、小テストの点数など、本当にいろいろなことでメールや電話をした。

時には、対戦車道の話題で戦車について聞いたりした。

西住の戦法は面白い、多種多様な各国の戦車の撃破方法についていろいろ話し合ったが、予想を上回る考えを突きつけてくれた。

特に、キングティガーをM5軽戦車で倒す方法がなんとも度肝を抜かれた、そんな方法があつたとは……………なんて驚いたものだ。

そんな日々を過ごしていると、生徒会が練習試合を取り付けてきた

といきなり言ってきた。

「正気ですか？」

「正気だよ、プラウダ高校と聖グロリアーナ女学院の練習試合に、戦車猟兵として入れてもらったから」

干し芋を食っている小柄な生徒会長にそう告げられたのだ、それもいきなり。

「試合はいつですか？」

「およ？意外だねえ、文句くらいあると思ってたけど」

「取り付けてしまったものは仕方ないので、聖グロリアーナ女学院のメンツのために出ます……しかし、試合後に今回の事案に関しては抗議文を提出し、たしかな謝罪を要求します」

聖グロリアーナ女学院はイギリスをリスpektしている高校と西住から聞いた、なら本国の留学生として交流と親善目的で戦車猟兵として参加するのもやぶさかではない。

「んも、そんなねちっこいこと言わないでさあ」

「いくら受講者が私1人とはいえ、勝手に他校同士の練習試合に組み込むなどという横暴を許せるものではありませんので」

そう、対戦車道受講者は、私1人だけだったのだ、戦車道は人気なのに対戦車道は不人気なんておかしい話だ。

受講者が1人なので予算はほとんど無いに等しく、高校1年の部活動で予算1万円とか笑えん。

いや本当に笑えん、予算がないのはしょうがないとしても対戦車兵器が貧弱極まり無いのがなんとも……ライフルがあるだけマシンかもしれないが、アカの戦車にどこまで通用するか。

せめてPaKがあれば……いや、どうせ維持費に食いつぶされるだけか。

「うっ………ほ、本当にごめんって、予算もうちよつと都合つけるから、ね？」

言ったな？5倍くらいにしてもらおうか。

「はあ、それで試合の日時は？」

「えつとねえ、試合は4日後の午後4時から、ジョーちゃんは『ジョー

ジ』、もしくは『カーライル』と呼んでください」

馴れ馴れしいのは嫌いだ（イギリス人並感）

「……………距離遠いなあ、まいいや、ジョージちゃんは聖グロリアーナ女学院側の戦車猟兵としての参戦、お互いの戦車についてはここに書いてあるよ」

差し出されたプリント用紙を受け取る、そこには試合日時と各校の使用車両の名前が書かれていた。

4日後か、となると、日曜日になるわけか、放課後は整備と練習に忙しくなりそうだ。

「適当にやっちゃってよ、負けたってペナルティーとかないからさ」

「いえ、やるからには聖グロリアーナ女学院を勝たせますよ」

西住からもらった数々の知識を詰め込んだ資料、4日間という準備期間、まるでお膳立てされているようだな。

勝てば西住にしっかりと報告もできるだろう、お前のおかげで勝てたぞ、ってな。

「おっ！やる気あつていいねえ、なにになに？彼女のためだったり？」

「女の子ですが、残念ながら友達です、こういうことに詳しい人でして」

「いーねーそういうの、青春だよ青春、ねーねー、その子の名前教えてください？」

「嫌です、では私は試合の準備もありますので、失礼します」

会長がうざったいので返事を待たずに退室する。

廊下を歩いて対戦車道部員の部屋を目指す、対戦車道部員というか受講者は私1人なので、実質私だけの部屋だが。

すれ違う女子に目を逸らされまくり、男子からは可哀想なものを見る目で見られながら歩く。

やはり、イギリス人の顔は日本人からして怖いものなのだろうか？たしかに仏頂面かもしれないが、これでもマシな方なんだぞ？

本国の友人（イギリス人）は、もつと偏屈だぞ？

まあいい、とりあえず練習の前に、武器のチェックからいこう。

まず、我が英国の対戦車兵器、ボーイズ対戦車ライフルが一丁、これは古品だがかなり頑丈なシロモノだ。

相手がアカの戦車ということでは本来の対戦車戦闘には不向きだが、使い次第ではペリスコープ（潜望鏡）の破壊やバイザーブロック（覗き窓）の向こう側にいる運転手への攻撃、履帯部や場合によってエンジンブロックへだつてダメージを入れることができるはずだ。

弾丸も強力な13.9mm口径で機関砲並みのサイズなので、小技として対戦車地雷や爆薬を狙撃して爆破したりできるかもしれない。

そしてもう一丁あるんだが、これは傑作だぞ、特にプラウダなんかに向けて撃つとなかなかジョークが効いてて良いかもしれん。

ジョークはジョークでもブラックだが。

ラハティL-39対戦車ライフル、かのフィンランドにてアカの紙装甲戦車を数多く葬り去った数多くある対戦車兵器の中のひとつだ。

口径はボーイズが13.9mmに対しラハティはなんと20mmと大口径。

貫通力も高く、ボーイズが100ヤード（およそ90m）で20mに満たない貫通力なのに対し、ラハティは300mで20m、100mではその倍はあったとされている。

弾速も長銃身のため、ボーイズと比べて速く、偏差射撃もやや簡単だろう。

加えて20mmという大口径ならではの破壊力、かするだけで未対策のペリスコープは粉々、履帯もものによっては一発で切れるはずだ。

欠点としては、ボーイズ三丁分でもまだ足りないほどの大重量を誇ることで、そして長さは2m以上と長大だ。

フィンランドでは雪上をソリで移動できたが、あいにく、今回の試合はこれを担いで山中を練り歩き、来るかわからない敵を待ち伏せし、攻撃後また担いでダッシュで逃げなければならない。

大変な重労働だが………あいにく私はそういうことに慣れてるもので、それ自体は特別苦ではない。

問題は、2mもあるラハティを担いで見つからずに逃げ切れるか、



ということだ。

最悪は放棄も考えねばならない、その時は確実に破壊されるだろうから修理しなければならなくなる、だが予算がないため修理は不可能だろう。

私が自分で直しても良いが、あいにく現地修理のために予備部品を作って持って行けるほどポーチに空きはない。

それから、これが一番重大な問題なんだが、弾丸が20発しかないことだ。

弾丸は安いんだ、だが安いからとそこに予算をつぎ込んであともが無くなる。

それにだ、対戦車道は対戦車兵器だけでは勝てない、いざとなれば戦車に飛び乗ってハッチから搭乗員を射殺する必要がある。

対人兵器、拳銃やサブマシンガン、狙撃銃なども持っていかなければならず、こちらの弾代も考えなければならぬ。

狙撃銃くらいなら、戦車の車載機銃と同等のもので多いので、恵んでもらうこともできたが、残念ながら大洗学園に戦車道部はないのだ。

たとえ補充できても、接近戦でとっさにバラまけるサブマシンガンや拳銃より有用性が低く、対戦車ライフルで代用もできるため基本的に不要という不遇さ、泣いて良い。

うちに埃をかぶってた中で一番マシンなのが、ステンガン、英国を救った鉄パイプサブマシンガンである。

拳銃は、なぜか残っているのがM1911が一丁しかなく、サブマシンガンの所有数に比べて少なすぎるのが気になるが、使えそうなのでよしとしよう。

どうせならM1911に合わせてサブマシンガンはグリースガンがよかった、いや、中折れ式リボルバーでイギリス装備のほうが良いな。

予算の都合でそれも難しいが。

あとは、ぎつくりいって梱包爆弾や収束手榴弾、対戦車地雷が数十以上、まあこんなものか。

さつそくフル装備をしようか。

まずは体操着に着替え、そして分厚い防弾プレートアーマーを仕込んだブーツを履き、特殊カーボンを編み込んだ装甲服を着て、ガスマスクをつける。

今度は武器や弾薬だ、まずは背中の腰あたりに大型ポーチをつけて、ここに弾薬や爆薬を入れておく、サイドポーチを両腰につけたら、そこに武器の整備道具とサブマシンガン等の弾薬を入れておく。

背中のポーチ下にサブマシンガンを吊るし、対戦車ライフルなどの長モノは背負うか持って歩く。

あとは全身に対戦車地雷を巻きつけておけばいい。

これで、フル装備完了、夏でも冬でも雨が降ろうと雪が降ろうとこの格好でやるのだそうだ。

なるほど、受講者がいないのもうなづける、これは気候やマップによつては辛い。

だがこれのおかげで安心して戦車と殴り合える、西住のアドバイスをまとめた資料を読みながら、学園艦の敷地すべてを使って練習だ。

対戦車戦闘は待ち伏せ、ただひたすらに戦車が来るのを待つ、潜水艦のように生い茂る草木の中や泥沼の塹壕の中に潜み、いざ戦車が接近すれば果敢に攻撃……それが基本となる。

西住が教えてくれた戦術の一つは、敵にとつての目標地点を確定し、その進行ルート上どうしても通らざるを得ない道に対戦車地雷を敷設する。

複数ある場合、一箇所を除き対戦車地雷を敷設し、バリケードなどを置いておき、残る一箇所は戦車猟兵が直接『狩る』、という方法だ。生徒会長から渡された資料によれば雪原地帯、かなり広大な戦闘地域であり、廃墟や村を模したオブジェクトが複数設置されているようだ。

加えて夜戦だ、凍えるような寒さに耐えられるように工夫し、雪に紛れやすい白色迷彩を施し、たとえ何十時間雪中で待機していようとも、いざとなれば軽快に走り抜けられるようでなくてならない。

とりあえず、4日間という期間はそこまで長くない、西住から話を

より詳しく聞きつつ、装備の工夫と戦い方を知らなくては。

『西住、練習試合をすることになった』

『ええ!? ジョージ君のそこは1人しかいないから練習試合はできない  
と思っただけだ』

『うちの学校は貧乏高校でな、留学生が日本で対戦車道をやるついで  
うことで人気取りでもしたいんだらう』

『大変だね、何か手伝えることはあるかな?』

『ある、西住の力が必要だ』

『任せて! それで、何をすれば良いのかな?』

『4日後に聖グロリアーナ女学院側の戦車猟兵としてプラウダ高校の  
T-34の群れと夜の雪原マップでタップダンスだ。』

西住の意見が欲しい、あらゆる方面での思いついた限りのものを』  
『はい、まず、雪原はプラウダ高校の得意なフィールドですから、相手  
より早く動いて有利位置を取るという方法はほぼ無理でしょう。』

タンクデサントで潜伏目標まで運んでもらうにしても、聖グロリ  
アーナの足の遅いマチルダやチャーチルでは雪上では犬掻きをする  
ようなものです。

思い切って戦車の戦闘地域を大きく迂回して進み、側面攻撃を与え  
るのが効果的だと思います。

夜戦でランプをつけるようなことはしないと思うので、相当接近し

なければ攻撃は通用しないと考えられるので、危険な賭けになります。

相手の戦車がT-34なら、もっとも薄いのは上面装甲、垂直で20mmくらいだから、100m以内で当てられるなら対戦車ライフルで狙ってみるのもありかもしれないね』

『ありがとう西住、立てるべき戦い方の目処はたった。

西住さえ良ければ、試合までに一度会って作戦会議をしたい。

俺がそっちの学園艦に定期便で行こうと思ってる。

空いてる日はあるか?』

『土曜日が空いてるから、午後に着くように定期便に乗って来て、入り口で待ってるから』

『わかった、こっちの名物を土産に持って行くよ』

『ありがとう!待ってるからね!』

## 知恵を借りて作戦会議を

Vooooooooo……

波に揺られること数時間、黒森峰の学園艦に乗船した。

受付にて乗船許可証を提示し、学園艦の街へ。

ドイツをリスペクトしているだけあり、入り口はブランデンブルグ門を模したアーチがあり、街並みは綺麗に整い美しさを感じさせる。

小さな聖堂や教会もあって、霧のロンドンとはまた違っていで、T H E・普通、という大洗とも違う、無駄のない洗練された美しさを感じさせる。

つと、観光してる場合じゃない、遊びに行くのは試合が終わったらだ、よし、西住の待つ喫茶店を探そう。

実はあの後メールで『せっかくだからちよつと街並みを見ておきたい』と言って現地の喫茶店で集合することにしたのだ。

西住は迷子にならないでくれと送ってきたが、おいおいこの歳で迷子は……いや、迷子になる人もいるか、この街並みでは。

さて、喫茶店と一言で言っても特徴はいろいろある、ここ黒森峰の学園艦の喫茶店の特徴は、ノンアルコールドイツビールが飲めることだ。

もちろん、コーヒーも美味しい、だがマジノ女学院もなかなかのはず、向こうはフランスリスペクトだし、きつとワインも……ああ、今は飲めないんだったか。

おっと、見つけた。

お洒落な扉を開けて店内に入る、見た目より小さな喫茶店で、オーナー人でやっているようだ。

小さな店内で私服の西住を見つけるのは簡単だった……というか、西住しかないからな。

「g u t t e n T a g 西住」

「ふえ？……あつ、ジョージ君、こ、こんにちは」

自分のそこそこのドイツ語で挨拶したが、どうやら西住はドイツ語に明るいわけではないようだ。

まあ英語のほうが……面倒だから日本語でいいだろう、うん、面倒ごとは避けるべきだ。

「少し遅れてしまったか？」

「ううん、そんなことないよ、私も今来たところだから」

「そうか、ではさっそく作戦会議……と言いたいところだが、お腹が空いてしまったな、ちよつと食べたいんだが、おすすめはあるかな？」

「おすすめって言われても、私はそんなに詳しくないよ？」

「いいんだ、西住の好きなものを食べたい」

「え、あ／＼／……うん、ちよつとまってね」

メニュー表をとってどれにしようか選び始めた、少しプレッシャーをかけすぎただろうか？

しかし、西住は弄りがいのある表情をする、まるでボコだな。

「しかし、前の制服姿もよかったが、その服も綺麗でいいな」

「ほ、ほんと？」

メニュー表から頭をスツと上げて私を上目遣いで見てきた、西住って結構魔性だな。

「ああ、とてもよく似合ってる、うん、カワイイ」

「か、かわ……ふみゆう……」

恥ずかしい表情を見られないようにメニュー表を盾にする西住、やはり弄りがいがある。

だが戦車道の試合では凛々しい表情を見せるんだよな、そのギャップも良い。

「……えつと、こっちのワッフルケーキとパフェが美味しいよ」

「ふむ……じゃあ、今回はワッフルケーキにしよう」

「うん、店員さん呼ぶね」

「西住はもう決まっているのか？」

「え？私はいいよ」

「そう言うな、せっかく貴重な休日を使ってくれたんだ、奢らせてくれ」

「そ、そんな！別にいいよ、私だって気分転換になればと思って……」

「気分転換なら、美味しいものを食べたりしたほうがいいんじゃないか?」

「じゃ、じゃあ…………えっと…………」

うーん、決まりそうにない、仕方ない、店員呼ぶか。

「ご注文お決まりですか?」

「こっちのワッフルケーキとこっちのパフェを」

「ジョージ君!」

「ハハハ、もう頼んでしまったぞ西住、それで飲み物は?」

「うう……………それじゃあ、アイスコーヒーを」

「わかった、店員さん、それとアイスコーヒーふたつ」

「かしこまりました、しばらくお待ちください」

カウンターのほうに戻っていく店員、というかオーナーは、小さなキッチンでワッフルを焼き始めた。

「その、ご馳走になります、ジョージ君」

「気にするな、急な呼び出しでお礼も兼ねてるんだ、気にせず美味しく食べてもらったほうが、こっちとしても気分がいい」

「うん……………ありがとう、ジョージ君」

「お礼を言うのは私の方なんだがね」

「ふふつ……………あれ?いつもの俺って言わないんだ?」

「ん?ああ、あれは西住と2人の時くらいしか使わないからな」

あの、いつになく熱くなってしまった一件以来、西住とのメールでは俺で通しているが、感情的になると出てくるものだししようがない。

前は、感情的なことができずにいたからな、その反動もあるのだろう。

「もちろん、西住が違和感を感じるのなら、私はこれから自分を俺と言うが……………どうする?」

「私は……………うん、ジョージ君は『俺』のほうがいいよ、そっちのほうが……………か、かつこいい、と思うし」

「そうか?じゃあ、これからは俺で通そう」

なんか、気持ち楽になった気がする、人付き合いで損得勘定する必

要がないというのはここまで気楽でいられるのか、素晴らしいな。

「俺、俺か、なんだか話すのが楽になった、やっぱり俺には堅つ苦しいのは無理みたいだ」

「ふふっ……………ジョージ君はちよつと女の子っぽい顔と身長だけど、男の子らしいっていうのかな？そういうのが出てると思うよ」

「うぐっ……………西住、できれば女顔については言わないで欲しい、ちよつと自分でも悩んでてな」

「ぐ、ごめんね！も、もう言わないよ」

「助かる、向こうでは散々いじられたのでな、少しウンザリして……………すまない、愚痴を言ったな」

「全然いいよ！だって、愚痴を聞くのも友達でしょ？」

「ふっ……………全くその通りだな、さすが西住、俺のベストフレンドだよ」

満面の笑みでそう言う西住、自信に満ちた姿にしばし心奪われた。

「はい、ジョージ君は私のベストフレンドですからね」

「言ってくれるよ……………さて、このまま楽しくおしゃべりしてもいいが、ここらでひとつ西住の知恵を借りたい」

持ってきたバックから練習試合に関する資料を取り出した、フィールドのマップはコピーしたものをビニールを被せて事前に汚れないようにしておいた。

ついでカラフルな水性ペンを4、5本ほど取り出して資料と一緒に机に置いた。

「フィールドは雪原で変わりなく、双方の使用車両も変更なし、時間もそのまま夜戦は確定、プラウダは戦車猟兵なしだ」

「……………狙撃できそうな高所はある？」

「事前に分かっている高所は10mほどの塔がある程度で、あとは高さ2〜3mほどの民家風オブジェクトが並んで村のようになっていて、それが合計で5カ所、マップの中心部とそこから各角に向けた直線上のどこかにあって、各村に2〜3棟ある」

「それだけあれば十分だよ、聖グロリアーナ女学院とプラウダ高校のスタート地点は？」



「聖グロリアーナは北西の村近くからになる、プラウダはその逆」

「夜戦で雪原フィールドなら遭遇戦が前提になるはずだから、足の速いT-34を使えるプラウダ高校のほうが有利、聖グロリアーナ女学院のチャーチルやマチルダで遭遇戦は厳しいからどこかの村で防戦をすと思う」

「となると北西の村か？」

「スタート地点すぐ近くにある北西の村なら、陣をこしらえるのに時間は十分にある……でもそうになると、機動力のある相手に北東、南西側からも攻められて退路がなくなっちゃう」

「無理にでも中央の村を取るべきか？だが、我が国の戦車ではあるが、チャーチルの登板能力はともかく走行性能はあてにできない、原付の方がまだ速い」

「うん、だから聖グロリアーナ女学院の隊長さんは、たぶん北西の村で陣地をこしらえると思うの」

「だが、それだと退路はないんだろう？」

「それは相手にとつても同じ、陣地をこしらえるなら村の深いところでやらないや意味がないの、入り口で待つても先に発見される可能性があるから、でも村の奥で構えていれば相手はすぐには攻撃できない」

「なるほど、見え見えの罠を張って突っ込むのを躊躇させるわけか」

「うん、それで、ここからはジョージ君の仕事になるんだけど、各村にスノーモービル『アエロサン』RF-8が設置されているみたいだから、これを使おう」

「どうするんだ？」

「まず、聖グロリアーナ女学院が村の奥に籠って籠城を始める、しばらくしたら、プラウダ高校は、こうやって……」

北西の村の中心付近に青ペンで円を描い西住は、赤ペンに持ち替えて村の外側から中心に向かう矢印を描いた。

「青が聖グロリアーナ女学院、赤がプラウダ高校だよ」

そう説明を加える西住の表情は楽しそうである、まるで、これからいたずらする子供みたいだ。

「ある程度包囲されたら、ジョージ君はアエロサンを使って、こう迂回して……………」

村の後方より黒ペンが走り、プラウダの包囲より外側を半円で囲った。

「……………こんな感じに、攻勢をかけるプラウダ高校を、時速50km出るアエロサンで回り込んで、背面から奇襲するの！」

おお、まさに『いたずら大成功!』といった自信に溢れる笑顔だな、俺には眩しいよ……………」

「このとき攻撃するのは車体よりも履帯や外部燃料層、できれば砲塔基部を優先して攻撃して、行動不能にして欲しいの、足さえ止めれば垂直に狙えるから、そうすればマチルダの砲でもT-34を撃破可能、行動不能になった戦車の砲塔の向きを聖グロリアーナ女学院の戦車に無線機で教えれば、安全に処理できるはずだよ」

無理に撃破を狙わずに行動不能にさせ、無線機で連携を取って戦車に撃破してもらおう。

なるほど確かに、夜戦で遭遇戦ともなればそもそも人影すら視認するには難しい。

吹雪が出たりすれば、いくらスノーモービルがうるさくとも、戦車の小さなペリスコープでは見えず、自車のエンジン音で聞こえもしないだろう。

「このとき気をつけなきゃいけないのは、履帯を攻撃して行動不能にしたあと、すぐにその場を離れて反撃を受けないようにしてね」

「H&A（ヒットアンドアウェイ）、一撃離脱の徹底だな」

「うん、夜で視界が悪いとはいっても、包囲している状況で後ろから衝撃を受けたら戦車猟兵が自分たちの後ろにいるってバレちゃうから、2回目以降仕掛けるときは慎重に、ちよつとでも危ないと思ったらアエロサンで逃げて」

「わかった」

「ふう……………こんな感じだけど、いけそうかな?」

「ああ、いけそうだ」

問題は、ラハティで履帯を1発で切れるかどうか。

そして夜戦ということなので、20m〜50mくらいで撃って離脱できるのか。

最悪、雪に埋もれて相手から見えないようにすればいいが、寒くて凍え死ぬか。

「ほつ、力になれてよかった」

「西住がいれば100人力だよ、持つべきものは友だ」

「そんな……恥ずかしいよお」

「お待たせいたしましたお客様、ワッフルケーキとパフェ、アイスコーヒーふたつになります」

やつときたか、喉が渴いてしょうがない。

「ただこうか」

「うん、いただきます」

そう言えば、西住の動作はどれも流れるように綺麗だな、良家の出身なんだったか？

戦車道の流派の家元の娘、って言ってたか、なら一挙一動すべてが綺麗なのも納得だ。

「おいしー……」にへえ

甘味を食べてだらしねえ顔してるのは綺麗ではないな、これはかわいというんだな、うん。

俺も食べるとするか……コーヒーは存外悪くない、だがやはり紅茶に比べ苦味が強く、香りも全く異なるもので強烈な違和感を感じる。

しかし、このワッフルケーキの甘い味付けと正反対の苦味のおかげか、とても美味しく感じる。

なるほど、ワッフルケーキ自体が甘いからこそコーヒーの苦味が引き立つ、逆もまた然りというわけか。

イギリスでは主にプレーンスコーンをジャムや蜂蜜を付けずそのまま食べていたから、甘い味のする柔らかいパン食品とは少し遠かったから違和感を感じたのか。

うむ、美味しい。

この後、西住との談笑は続いた。

## くじ引き作戦

支払い終えて、喫茶店を出る。

せっかく黒森峰に来たのだし、いろいろ見てみたいから案内をしてくれと西住に頼んだ。

西住の案内のもと町内を回っていると、コンビニの広告が目に入った。

なんてことない、600円でくじが一回引けるというだけのものだ。

ただのくじ、そう、一等賞がボコの描き下ろしイラストパジャマでなければただのくじだった。

ボコの描き下ろしイラストパジャマ……俺が着る必要はないし着たい気持ちもないが、1人のファンとしてあれを欲している。

「ジョージ君……その……」

「西住、行くのか」

西住はすでにホルスター（財布）から銃（お金）を抜いている、ワルサーの8連発（5000円札）とは……どうやら本気のようなのだ。

「うん、ここで決着をつけるよ」

使えそうな銃（残金）は……5連発（3000円）のS&Mくらいだな。

チャンスは5回……狙うはヘッドショット（一等賞）だ。

「私がお先に行くよ」

言うなり西住は5000円札を店員に差し出し、くじを引いた。

結果は……。

「そんな……」

4等がひとつ、残りはすべて5等、残りは！すべて！5等ツツ！

「こんなの、あんまりだよ……」

「畜生、魔女の婆さんの呪いだ……」

1発も当たらないとかシャレにならんぞこれは……ちっ、だが西住はくじを引いちまったんだ、俺も引かなきゃいけねえ。

ボコファンとして、逃げられねえ。

「すみません、くじお願いします」

「はい、5回ですね、どうぞ」

腕をくじ箱に突っ込む……………くっ、まだ中のくじが多い、触っただけでも20枚以上はある。

いっそ10万円（重機関銃）並みの金額を出してこのくじ箱をひっくり返してやりたいくらいだ。

仮に20枚あるとして、その中の一等賞の1枚を5回のチャンスの中で引き当てなきゃいけない。

本物（一等賞）と偽物（二等以下）を見分ける手段も使えない。

くそっ、だから運が絡む戦いは嫌いなんだ！『前』は常勝の祝福を受けていた、今はもうそうでは無い。

だが、それでもこの歳まで一般人レベルの能力であらゆるものに勝ってきたんだ。

この勝負にも勝たなければならん！

まずは1枚目！

「はい、めくりますね」

当たっちゃいないだろうさ、チャンスは5回もある！限界ギリギリまで数減らしをしていけば、確率は上g

「一等のボコの描き下ろしイラストパジャマです」

……………えっ？

「あ、ありがとうございます……………」

「続けて引かれますか？」

「あっはい、引きます」

どんな顔して喜びやいいんだこれ……………西住もレイプ目だぞおい。

もしかして、運のステータスが上がったのか？

う、ううん？

残りの4回でボコマグカップを2個とボコボールペン1本、ボコぬいぐるみをゲットした。

マグカップは3等、ぬいぐるみは2等だ。

ああ！西住が死にそうだ！

「西住……………」

「あはは、あはははは………」

なんと言うか、すまん……………」。

あつ、そうだ。

「あー、パジャマは俺が着ても仕方ないし、西住にやるよ」

「えっ！いいの!?!」

復活が早いなおい、さすが西住流。

「でも、さすがに悪いよ、喫茶店でも奢ってもらっちゃったし」

「むっ、そうか、これでは貢ぎすぎかもしれん……………よし、ならば西住、俺が試合に勝ったら受け取ってくれ」

「ええ!?!」

「戦勝祝いに参謀へプレゼントつてことで、どうだ?」

「う、うーん?……………じゃあ、じゃあ、ジョージ君が勝ったら、受け取るけど……………本当にいいの?このパジャマ、黒森峰仕様の特別品だよ?」

「……………正直譲るのは惜しい、だが、西住の力を得て試合に勝つてそれで何もお礼ができないほうがもっと口惜しい、だから勝ったら受け取ってくれ」

「頑固だなあジョージ君は……………」

「西住に頑固と言われちゃ、俺も相当なもんだな」

「むう……………」

頬を膨らます西住、リスみたいだな。

「ははは、意地悪をしたな、ところで西住、俺のマグカップとボールペンを西住のボコストラップと交換させてくれないか?」

「え?いいの?」

「マグカップはどっちも同じ柄だし、ボールペンは持ってもそれほど使うことがないから……………西住の取ったボコストラップで重複しているものがあれば交換して欲しい、どうだ?」

「いいけど……………なんか、私ばかりもらっちゃって、悪いなあつて……………」

「何を言うんだ西住、ファンであるならグッズの自慢や交換くらいす

るだろ？俺は西住とボコフアンの同志として、マグカップとボールペンをストラップと交換したい」

「ボコフアン……………うん、そうだね、ボコのファンなんだもんね！」  
こうして、戦いは終わった。

戦果は俺の方が大きかったが、西住の貢献（くじを8枚減らす）で得たもの、報酬は山分けだ。

「あっ」

「どうした？」

「お金、使いすぎちゃった……………」

「ええ……………」

勢いよく5000円札をブチ込んだ奴とは思えないほどの落ち込みよう。

まあ、冷静になってみると『やっちゃまった……………』ってブルーになることはよくあるしな、こればかりはなんとも。

「……………サイゼ〇ヤでよければ、奢るぞ？」

「……………お願いします、ジョージ君」

なんとも締まらない西住とのデート（？）であった。

『今日は本当にごめんね！お昼だけじゃなくて晩御飯まで奢らせちゃって、今度お礼するからね！』

『楽しみに待ってる、それと明日の試合、応援してくれよ？』

『うん、絶対応援に行くから！』

『期待してる、明日に備えて早めに寝るよ、おやすみ西住』  
『おやすみ、ジョージ君』



## 練習試合開始!

試合当日、天候はあいにくの曇り空、試合開始まであと2時間というところで、聖グロリアーナ女学院とプラウダ高校の生徒と戦車が試合会場に到着した。

プラウダと聖グロリアーナの準備場所はかなり離れているが、戦車は見えてしまう、距離は会話が聞こえない程度、と言ったところか。

まあ使用する戦車は事前に資料で配ってあるからバレるも何もないが。

続々と戦車が輸送車両から降ろされて行く中、俺は1人フル装備でバイクにまたがって集合がかかるまで、西住の作戦を資料を片手に何度も読み返していた。

このバイク、BMW・R75は大洗学園に古くからあった軍用バイクで、ドイツ国防軍や親衛隊が使用していたと聞く『名馬』だ。

どうやら10年以上前の大洗学園内の対戦車道と、今は亡き戦車道の練習試合中に大破寸前の状態になり、自動車部に担ぎ込まれたが修理部品が調達できず放ったらかしにしてたら大洗の対戦車道は衰退、戦車道は無くなってしまったのだとか。

俺が対戦車道に入部したのを聞いて会長がすぐに自動車部にレストアを依頼したらしく、その都合で多少の予算が削られたが結果として自動車部の協力を得てR75は蘇った。

分厚い装甲付きサイドカーには弾薬がたんまり、牽引車の中には対戦車兵器類と爆薬がたんまり、ドライバーは全身白づくめのガスマスクマン、ただの不審者だな。

しかしこれで重い対戦車兵器類を持ち運ばずに済む、自動車部万歳。

だが気になることがある、10年以上前は調達できないと言っていたパーツはどこから仕入れたんだろうか?もしや作ったんじゃないやあるまいな?だとしたら自動車部はプロだな。

帰ったら自動車部に礼を言わなければな。

すっかり本当に寒いな、いつの間にか雪もチラホラ降り始めた、

ホツカイロだけじゃまだ肌寒いな。

この寒さではヤル気も凍る、だがやらねば、親善目的の練習試合に無理やりねじ込んでもらったのだ、参加者や西住に失礼な真似や無様な戦いぶりはないし見せられない。

しばらくフィールドマップに描かれた図を見ると、聖グロリアーナ女学院の生徒が2人歩いてきた。

2人とも聖グロリアーナ女学院特有の赤い制服を着用しており、歩き方がとても優雅が、さすがは日本きつてのお嬢様学校。

そして、日本きつてのイギリススペクト高校でもある。

「御機嫌よう、ダーズリンと申します、こちらはオレンジペコ」

「御機嫌よう、オレンジペコです」

「ジョージ・カーライルさんですわね?」

名乗ってからの一礼……………優雅だ、まるで窓辺で紅茶を嗜む貴婦人のようだ。

だが日本人だ、金髪碧眼だが日本生まれだ、驚きだな。

「ガスマスク越しからで申し訳ない、私がジョージ・カーライルだ、ご紹介に預かり光栄ですダーズリンさん、オレンジペコさん」

「あら、こちらこそ光栄ですわ、イギリスの方とお会い出来、話ができるのですから」

「ははは、恐縮だな、今日の試合はよろしく頼む」

「ええ、こちらこそ」

聞けばこの試合、内密ではあるが次期隊長であるダーズリンの向上の為に前隊長が企画したものだとか、そこに丁度いいからとうちの会長が割って入った、と。

「それで……………ダーズリンさん、そちらの作戦は?」

「聖グロリアーナの戦車は雪上での長距離移動は困難、少々優雅さに欠けますが、試合開始地点からすぐの村にて陣を引き、籠城戦を展開しますわ」

西住の予想通りの作戦できたか、説明の手間が省けて助かる。

「こっちの作戦は、籠城する聖グロリアーナの戦車目掛けて突っ込んでくるプラウダの戦車を、フィールド設置車両のアエロサンで後方に

迂回して攻撃、足を奪うことだ」

「足の止まった戦車を私たちが撃破する……………そういうことですかね?」

「Exactly、プラウダには強力な装甲を持つKVや機動力のあるT-34がいるが、足さえ止めれば弱点は狙い放題、余裕があればターレットリングも潰しておくが……………あいにく、いくら視界が悪いプラウダの戦車でも、後ろから近づくのは怖いんでね、期待はしないで欲しい」

「機動力を封じてくださるだけでも十分ですわ……………もちろん、ターレットリングやペリスコープを狙撃してもらってもよろしくてよ?」

「予備も含めて全部撃ち碎い良いのかな?」

「As you like」

いい笑顔で言ってくれる……………ま、ペリスコープの狙撃くらいは余裕なんだが、問題は弾が足りるかどうかだ。

ラハティは20発しかないから履帯破壊用にとっておくとして、ボーイズのほう掻き集めた中で使えそうなのが50発、もちろん全部使うと予算の都合で購入できないかもしれないため、今回は30発を持ってきている。

つまり、最大で30個のペリスコープを破壊可能なわけだが、そううまくいくわけがない、今回は全部で10両、1両につき2〜3程度のペリスコープがあるとすればすぐにボーイズは弾切れだ。

たとえばできたとしても、ペリスコープは交換できるため、躍起になつて潰しても無意味になることの方が多い。

「さすがに弾が足りない、脅威になりそうな戦車の妨害に使う、必要な無線を寄越してくれ、出来る限り支援する、周波は……………これだ」  
俺の携行型無線機の周波をメモ書きをしてダーズリンに渡す。

「全車両の無線機への登録と、車長に敵車両の行動阻止攻撃の要請に関する話をおきますわ」

「あまり期待はしないように、とも伝えておいて欲しい」

「謙虚な殿方ですこと……………わかりましたわ、車長のみなさんには『積極的に』支援要請をするように伝えます」

「……………なかなかいじわるじゃないか」

「いじわるな女性はお嫌いですか？」

「そんなことはない、とても好みだ」

今は一般人レベルの私にしてみれば、そういう異性のほうが面白いからな。

「あら……………いけないお方、試合の前に口説かないでくださいます？」

そういうところだよダージリン、言いながらも楽しそうに笑っているじゃないか。

「怒らせてしまったかな？美しいお嬢さん？イギリスにもここまで綺麗な女性はいなかったものでね、つい……………申し訳なかったよ」

「ふふふ……………ええ、いいですわ、元より怒っていませんもの」  
だろうな。

あとオレンジペコの顔が真っ赤なのだが、風邪でも引いたのか？こんな寒いのにミニスカートなのだから引いても不思議じゃない。

「そろそろ戦車のエンジンをかけてきますわ、ジョージさんも早く準備したほうがよろしいですわよ？」

もうそんな時間か。

「お気遣いありがとう、ダージリンさん、ではお言葉に甘えて、備品の整理をさせてもらおう」

「ええ、またあとで」

一度分かれ、バイクを格納してブーツを持って集合地点へ。

集合地点の周囲には壁が設置され、プラウダ側からは様子を伺うことはできないようになっていいる。

聖グロリアーナ女学院の生徒の少し後ろから作戦説明を見る。

「私たちの戦車では雪上を優雅に走行できても、相手には機動力で負けてしまいますわ、そこで、スタート地点すぐの村の中心にて防衛陣地を引きますわ、ペコ」

「はい、装甲の厚いチャーチルを中心に、死角になる場所や建物の角にマチルダを展開、内側に引き込んでマチルダで撃破、KV重戦車はマチルダの主砲では厳しいのでチャーチルが相手をします」

中心の村のある方向に向けて村の中の建物の角に扇状にマチルダを配置し、チャーチルに飛びついてきた戦車を背面から攻撃して撃破するわけだな。

おそらくダージリンはチャーチルの車長、自車を囮にするとは、またなんとも豪胆な手に出たな。

確かにチャーチル、それもマーク7ならば、正面152mmの重装甲でプラウダの砲弾は全て弾ける、さらに側面は95mmと、側面だけでもティーガーの正面並みにある、実に頼もしい。

しかしそれでも車体後部は51mmと不安が残る、プラウダのどの車両でも垂直ならば貫通は容易なのだ。

「ダージリン様、それでは回り込まれたときの対処ができませんわ」「それは、彼の方が警戒して逐一連絡をしてくれませぬわ」

ダージリンはそう言うて俺を見据えた、ダージリンの視線を追って他の生徒も私を見て困惑の表情を浮かべている。

これは自己紹介の流れだな。

「イギリスから留学してきた、大洗学園対戦車道所属のジョージ・カーライルだ、聖グロリアーナ女学院側にて戦車猟兵として参加させてもらう、よろしく」

「彼は私たちの後方警戒とプラウダの戦車の行動を阻害し攪乱する役割ですわ」

「厳しい状況にある時は無線をかけてくれ、できることはプラウダの戦車の履帯やペリスコープの破壊と、紅茶が沸騰するくらいにエンジンを燃やしてやることくらいだ、過度な期待はしないで欲しい」

「私たちが村に戦車を引き込み、彼が動きを止め、私たちが的確に冷静に撃破するのですわ……………他に質問はありませんか？」

納得した表情でうなづく生徒たち、ダージリンは素質があるな。

「では、各員搭乗、スタート地点まで移動しますわよ」

「ダージリン、すまないが、私を上に乗せてもらっても良いかな？」

「よろしくてよ、座席はありませんが、我が校の戦車はどんな運転をしても、一滴も紅茶をこぼしませんのよ」

「乗り心地に期待させてもらおう」

少なくとも小柄で揺れに揺れるT-34にタンクデサントするよりは、全長が長くてサスペンションの性能も高いチャーチルのほうが快適だろうことは明白だ。

「チャーチルの操縦手と、不整地走破性の高さに期待しよう」

チャーチルの車体後部上面に飛び乗って座る、全長が長いと座りやすくて良い、砲塔の高さも相まってここから対戦車ライフルを撃つのも面白そうだ。

350馬力のトルクはあるが非力なエンジンを回しながら、チャーチルは走り出した。

チャーチルを先頭にマチルダがついてくるという、なんとも可愛らしい、アヒルの親子の行進のようである。

車体の揺れに合わせて揺れる、ボーイズ対戦車ライフルに付けたボコストラップ。

星のマークがついたM1ヘルメットを被り、M1カービンを持った何処と無くベトナムチックなボコである。

ぼんやり見ているとふと思う、ベトナムチックなのは負けたからだな………なんてことを考えているうちはまだまだ余裕なのだろう。

と、装甲板入りポケットの中でケータイが震えた、取り出してみるメールが一件あった。

開いてみると、西住からも応援メールだった。

『来たよー・応援してるよー・頑張ってー！（ボコのスタンプ）』

ボコのスタンプの入った西住らしい応援メール、ジーンと胸にしみる感動、即座にお返しメールを送信する。

『西住が応援してくれるなら、俺は絶対に勝つよ』

こういうのを日本ではこう言うんだっか………【負ける気がしない】

スタート地点に着き、合図を待つ、あと数秒………3、2、1  
……。

『試合、開始！』

『全車両作戦通りの位置へ展開』

アナウンスとほぼ同時にダージリンの無線がとんだ。

村に入ったマチルダ9両は地図上の予定の位置に着き、そこで2人を降ろしてシャベルで白い装甲板に周囲の雪をかけて偽装し始めた。

チャーチルも村の中心の広場で停車するとオレンジペコともう1人誰かが降りて車体についているシャベルを取り外した。

「私も手伝おうか？」

「いいえ、ここは大丈夫ですわ、まだ時間がありますので………ところでジョージさん、ひとつお願いよろしいでしょうか？」

チャーチルから飛び降りてオレンジペコに聞いてみるも、砲塔から身を乗り出したダージリンに阻まれる。

「お願い？」

「はい、知ってはいると思いますが、プラウダ高校のT-34は快速です、ですがこの村に設置されているスノーモービルはそれ以上の速度が出ますわ」

「………なるほど、中心の村に行つて偵察をしてほしいと言うことかな？」

「しばらくはそこで隠れて動向を監視して欲しいのですわ、機を見て妨害もお願いしますわ」

「わかった、嫌がらせをするでしょう」

プラウダのアカの戦車に雪上で犬掻きをする無様を晒させてやる。

地図を見ながらアエロサンを探して乗車、見た目は超簡易的なスノーモービル、機体後部についた推進用のプロペラと小型エンジン、

全体的に薄い装甲、上半身が隠れないスーパーオープントップ。

D P 機銃すら防げるか怪しいぞこれは……どうせ被弾は考えないつもりだから別にいいが、当時の人間は移動するたびに風が当たって寒かったのではなからうか？

今の俺はガスマスクを付けているから感じないが、速度計を見ると40kmで走っている、雪上でこれほどの快速とは、西住の読みは見事に当たっている、これなら相手より早く中央の村に着きそうだな。

……そういえば、J S、S U シリーズ全般に言えることだが、びつくりするほど搭乗員軽視の設計だったらしいな、狭いし脱出ハッチが少ないし、搭乗員が集中配置されているから運が悪いと一撃で搭乗員はミンチ、戦闘不能になるのだとか。

かと言って、Ⅲ号戦車くらい脱出ハッチをつければいいってもんじゃないし、ブラックプリンスみたく超重装甲にすればいいわけでもないのだ。

そう考えると、どれだけT-34、特に3人乗り砲塔の85はバランスのとれた戦車だったと言えるだろう。

まあ、米軍のM4にはちよいと及ばないが……主に居住性とかな。

さて、村が見えて来た、ちようどいい暗さだ、プラウダがどの辺まで来てるかこのまま向こう側を走ってみよう。

ふむ……ふむ……T-34-76とT-34駆逐を先頭にKV重戦車が来てるな。

聖グロリアーナの攻撃が無いことを踏んで速さを取ったわけか、確かに、サイドスカート付きで走ると泥や雪が詰まってしまうほど足回りが悪いとマチルダや、非力で鈍足なチャーチルではT-34より先に中央の村に着くのは無理だからな。

さて、見つかるはずだし、まずは聖グロリアーナが陣を引いている北西の村方向に向けてアエロサンを停車、降りたら高台に登って……はしごか、ちつ、ラハティが長くて邪魔だな。

どうにか登りきり、頭だけ出して偵察する。

プラウダの戦車は村の入り口で陣形を変え、KV重戦車を先頭に2



列で村の大通りを低速で進んでいる。

砲塔やペリスコープの忙しい動きから、どうやら戦車猟兵の攻撃を恐れているようだ。

なるほど、村の大通りを通るのはリスキーだが、村を迂回しては時間がかかる、速度優先で戦車猟兵がトラップを仕掛ける前に突入できれば無傷で通れる、そう考えたつてところか。

アカの戦車乗りには頭が回るようだ。

「こちら戦車猟兵、プラウダの戦車は全車両が中央の村を通過、シャンパンは準備できなかつた」

『こちらチャーチル、ティーパーティの準備ができましたわ、でも9名分しかカtrupがありませんの、あいにくお菓子も少ないので、申し訳ありませんが、大食いの何方かにお帰り願えませんかしら?』

「こちら戦車猟兵、茶菓子セットをプレゼントしてお帰り願う、アウト」

『アウト』

……………やるか。

背中のポーチから弁当箱を取り出す、弁当箱はその中心から木の棒が飛び出ており、紐が巻き付けられている。

そう、これこそ原初の対戦車兵器と言えるであろう収束手榴弾だ。

ポテトマツシャーに爆薬を括り付けた即席爆弾だ。

速度を優先して街中を突っ切る作戦は見事だプラウダ、だが突っ切るならもつと速度をさなきやダメだ。

収束手榴弾のピンを抜く。

丁度、車列の先頭が通りかかるタイミングで投下。

……………そんなに密着していると、地面に落つこちた収束手榴弾が車体の下に入って……………。

ボゴオオオオオオン!!

《プラウダ高校、『T-34-57』1両走行不能!》

まずは1両……………ははは!さすがアカの戦車だ!上から落ちて来た収束手榴弾にも気づかず、地雷だと思つてペリスコープと砲塔が忙しく地面をジロジロ見てやがる。

おおっと、報告しなければ。

「こちら戦車猟兵、お帰り願うことに成功した、ボリユーム満点のお弁当がお気に召したようだ」

『こちらチャーチル、お見事ですわ、実はそちらにいらっしやる『お固い方』、私少々苦手でして……お帰り願えませんか？』

「こちら戦車猟兵、なかなか強情そうだ、お弁当ひとつふたつでは無理だろう、別方向でアプローチをかける、アウト」

『武運を、アウト』

さて、次はKV重戦車をやれと言うのか、まったく無茶が過ぎるお願いだな。

そつと見てみると、戦車から数人が降りて地面を慎重に掘っている、どうやら完全に地面だと思い込んでいる。

先頭を走るKV重戦車より軽量で、しかも後方にいたT-34駆逐がやられたのに地面と間違うとは……対戦車地面の特性からやり直すことだな。

今ここで生身で無防備な戦車兵に向けてステンガンで仕掛けるのは危険だ、チャンスではあるが、同時に場所が割れる。

俺は最後の最後まで見つからない隠密行動を取る必要がある、不用意な行動は避けるべきだ。

よし、全員戦車に乗り込んだ、もう1発くらえ！……ちつ、今度はKV重戦車の上に乗っかっちゃった！

ボゴオオオオオン！！

これで上からの攻撃だとバレたはず、さつさと降りて狭い道で身を潜めなければ！

ちらつと見えたただけだが、どうやら履帯が切れたようだ、T-34駆逐1両の破壊とKV重戦車1両の足をもいだと考えるなら、妥当な戦果だろう。

警戒が強くなるだろう、いったん逃げるとするか。

アエロサンに乗り込んですぐに村を後にする、向かうは北西の村、ではなく北東の村だ。

聖グロリアーナとプラウダの殴り合いに横合いから殴りかかるク

ロスファイアの形をとろう。

覚悟しろプラウダ………徹底的に足を引っ張ってやるぞ。

プラウダ隊長（まだカチューシャではない） side

「履帯の修理急いで！」

「Даа！」

聖グロリアーナの補助の対戦車道のやつの攻撃で切れてしまったKV-1の履帯の修理を急がせる。

「地雷の搜索は!？」

「ぜんっぜん見つからない、きつとあれ一個だけね」

搜索のリーダーをしていた同級生からの報告を聞いて歯噛みする。

「ちいっ！地雷でT-34-57はやられちゃうし、KV-1は収束手榴弾で両方の履帯をやられた上にエンジンとトランスミッションにもダメージが………」

「でも、足の遅いKVで済んだのは幸いね、T-34が2両やられるよずっといいわ」

副隊長がそう言う、確かにT-34-57がやられたのは痛手だが、でも2回の攻撃で1両大破、もう1両のKVは幸いにも足回りの損傷だけですんだ。

ただでさえ遅いKVの足回りが損傷してしまったのはかなり痛い、だがT-34-57が2両やられるよりはマシだ。

KVではチャーチルを倒せないけれど、チャーチルの主砲では遠距

離のKVは抜きづらい。

まだ行けるわ。

「ええそうね、でもこれで10対8………時間も食われたうえ、聖グロリアーナは陣を構えてる、もしくはもつと頑強になってるかもしれないわ」

「これだけやって影も形もないなんて………本当に初心者なの？」

懸念は聖グロリアーナだけではない、さっきの信じられないほど鮮やかにT―34を撃破した対戦車兵の攻撃にも注意しなくてはいいけない。

「最近イギリスから留学してきたらしいわ、信じられる？日本に来るまで戦車道を知らなかったのよ？なのにこつちの動きが解ってるみたい在先制攻撃されて、攻撃の要のT―34―57を1両食われた」  
「………実はプロなんじゃないの？じゃないと、いくらT―34とはいえ地雷くらいじゃ………」

「隊長！T―34の下から手榴弾の柄が！」

「………そういうことか！」

収束手榴弾をT―34―57の車体底部に滑り込ませて破壊したのね！

「でもどこから？」

「………あの塔の上から落としたんでしようね、路地の索敵はやっていただけから」

「上から投げた手榴弾を地雷に偽装させて撃破した………じゃあ、最初から地雷は………ない!？」

「つつー！」

やられた！

「履帯の修理終わりました！」

「全員乗車！全速力で北西の村に向かうわ！」

「「「Da ー」」」

これ以上時間をかけていられない！これ以上こんなところに留まっていたら北西の村の防備がさらに厚くなる！

解っている地雷原を進まなきゃならないなんていうのは、パツクフ  
ロントに正面から突っ込むのと同じようなもの！

マチルダの主砲ならゼロ距離でない限りは無傷で突破できる、地雷  
原もT-34-76を盾に突っ込めば2、3両で済むかもしれない。  
でも、その後ろには75mmのチャーチルが待ち構えてる、ゼロ距  
離なら確実にこっちの全車両がやられる！

かと言って村の中に入ってもウダウダしていたら対戦車兵にやら  
れる……………卒業前の最後の練習試合がこんな最悪な状況とか笑え  
ないんだけど！

「たとえば、やられても、次の隊長がこの借りを返してくれるわ」

それでも、負けられない、負けてなんかいられない、負けてやるも  
んか！

「全国戦車道大会の優勝校として！」

戦車は地上最強だつてことを、歩兵に分からせてやる！

## ジョージside

「こちら戦車猟兵、お固い彼女にサプライズプレゼントを贈ったが、受  
け取り拒否されてしまった、足の脛をぶつけた様子だ」

『こちらチャーチル、最上の結果ですわ、お見事です、今はどちらにい  
らして？』

「こちら戦車猟兵、誰よりも先に太陽が見える村にいる」

『こちらチャーチル、わかりました、では、お客様が迷っていないか見

ててくださるかしら?』

「こちら戦車猟兵、わかった、ティーパーティーの準備は終わっているんだっただけかな?」

『こちらチャーチル、すで終わっていますが、より凝った飾り付けをしているところですよ』

「こちら戦車猟兵、了解、パーティー会場までお客様を見届ける、アウト」

『無理はなさらないように、アウト』

お次は偵察任務、障害物のない雪原でアエロサンに乗って止まっていたらいいのだ、中央の村と北西の村の直線上を見渡せるいい位置がないものか………………。

……………あつた、地図上では少しだけ盛り上がった丘のような場所がある、ここにアエロサンを止めて頭を出すくらいなら見つからないはずだ。

「そうと決まれば」

アエロサンに乗り込んでエンジンをかける……………かなり吹雪いてきた、あまり吹雪かないうちに目標地点に行かないと、敵の目の前に出てしまつては阿呆もいとこだ。

20m先も見えない雪原をなんとか進み、丘の裏側についた。

アエロサンのエンジンを切る、ラハティと無線機のみを担いで丘の上の方へ。

匍匐状態でラハティを隣に起き、頭を少し出して双眼鏡で覗く。

まだ通らないか、まあ当然か、だがT-34くらい見えていい時間なんだが……………。

うーむ、側面迂回か?北東方向にいる俺に見えないのなら、南西方向まで行つたか?

全軍で迂回は無いはずだ、だとしたら軍を二分化して正面と側面から攻撃するのか?

……………そういえば、結局の話になるが、プラウダは西住の言うような速攻は仕掛けてこなかったな、やはり戦車猟兵の存在はアカの戦車乗りにとっては恐怖か。

あの手この手で対戦車戦闘を挑んでくるドイツ兵に相当手を焼いたそうだしな。

まあ、そのドイツに新鋭戦車をことごとくやられてしまったのは、手痛い歴史というのかな。

だがティーガー1両に15両の新型巡航戦車クロムウエルがやられたというのは信じられないが……やはりティーガーは神造兵器か何かなんじやないか？

8.8cmを水平射なんかしてなければ、第二次世界大戦はもっと早期に解決していただろう、1943年くらいにな。

まあ、そうなった時は、より強力な対戦車兵器が出来上がってそうだが。

おっと……見えた、薄っすらとだが煙を吹いている奴がいるな、たぶんエンジングリル周りにダメージが入ったか、さすがは元祖対戦車兵器、M24を7個分で1.2kg近いTNTだ、威力が違う。

とりあえずKV重戦車が1両、他は……ちっ、視界が悪い。

結局見えたのは煙を吹いてるKV重戦車のみ、速度は……かなり遅い、10km/h出てるかも怪しい。

周りが速度を合わせているなら……あと60分で北西の村に着く、50分もすれば村からも薄っすらと煙が見えるはずだ。

「こちら戦車猟兵、時速10km〜15kmでドライブ中のオキヤクサマを見つけた、あと50分もすればお顔が見えるはずだ」

『こちらチャーチル、ありがとうございます、では動きましようか……2号車から5号車は村入口で待機、見え次第攻撃開始、無理はせず牽制で良いですわ』

やっど動くか、しかし牽制か……まあ、お世辞にもマチルダではT-34は抜けないだろうし仕方ないか、BTなら違っただろうが。

『戦車猟兵さんはしばらくそちらで動向の監視を、動きがあるようなら連絡をお願いしますわ』

「こちら戦車猟兵、了解、引き続き監視を行う、何かあれば通信をくれ」『わかりましたわ、では、アウト』

「アウト」

ふう………いい加減、雪の上で匍匐状態は寒くて冷たくてかなわん。

持ってきたホツカイロはもう冷めてしまっている、試合はこれからだというのに………。

「まあ、いいさ」

今はまだうまくいってるが、戦車同士の戦いになれば聖グロリアーナが不利だ、先手を打って1両を潰せたが、それほどの大差じゃない。

まだまだ、試合は長いんだ、観客席にいる西住をもっと楽しませな  
きやな。



試合、終了！

「……………妙だな」

あれからもう1時間と30分は経っている、なのにチャーチルのダーズリンやマチルダからの連絡はいつも通りのもの。

速度が一定なら、すでに攻撃をしていなければおかしい、どうなっている？正面からKV重戦車をぶつければ勝機はあるはずなのに。

一度引いた？吹雪が止むのを待って突撃する気なのか？だがさっきの煙吹いてるKV重戦車は通って行った……………。

まさか！

「こちら戦車猟兵！村の左右の防備を固めろ！」

『こちらチャーチル、どうしたのですか？』

「1両だけ見えたKV重戦車はブラフだ！わざと発見されやすい煙を吹いているKV重戦車をおとりに、村の左右から突っ込んでくるつもりだ！」

『……………そういうわけですね、2号車と3号車は引き続き前方の警戒を、4号車から6号車は東を、7号車から9号車は南を、10号車は1号車の後方を警戒しなさい』

「プラウダの編成にはKV—1sがある、速度の出るKV—1sとT—34を先鋒、時間差でKV—1が仕掛けてくるものと予想される、おそらく一番目立つであろう正面からKV—1、それ以外の方向からKV—1sとT—34の可能性が高い」

『聞いている通りですわよみなさん、各車それぞれの方向を嚴重に警戒、少しでも怪しいものが見えたら広域無線をしなさい……………聞いたの通りですわ戦車猟兵さん、万が一がありますので、報告があった方向へ偵察をお願いしますわ』

「了解、この吹雪ではまともに遠くは見えない、あたりをつけてブラインドショット（盲撃ち）が飛んでくるかもしれない、顔を出してみるときは十分に注意して欲しい」

いくら安全とはいえさすがにな……………間違っても雪原に飛び散ったザクロなんざ見たくない。

『あなたも十分に注意してくださいまし、生身なのですから』

「わかっている、こちらは引き続き動向を探る、吹雪が晴れそうならアエロサンで走りつつ偵察を行うことにする」

『わかりましたわ、アウト』

「アウト」

この吹雪では、止むのに時間がかかりそうだ。

仮に止んでも相当な時間が経っているため、吹雪に紛れて見つからないように既に布陣が済んでいた場合、晴れた瞬間に攻め込まれてはどれだけ早く無線が来ても2、3両はやられる。

アカの中戦車はその真価を発揮するのは至近距離での戦闘、正面の45mm60度の傾斜で約80mm前後、この数値では当然ながらマチルダの40mmでは貫通は厳しく、また砲弾の軽さ故に滑りやすい。

同じく軽い砲弾である50mm砲でもってしてもT-34撃破に苦労したⅢ号戦車同様、たやすく撃破されてしまうだろう。

何せ、向こうは76mmの大口徑砲と実質80mmの擬似装甲、さらに機動力までもあるのだ。

よく言えば車体側面垂直部、もしくは砲塔の防楯を避けた部位を撃てれば勝機はある、という程度。

悪く言ってしまうえば、当てられなければ勝機はない。

そのための俺なんだろう、マチルダもチャーチルも、プラウダの戦車相手では分が悪すぎる、ある程度のハンデをして組み込んだんだろう。

会長はやはりやり手だな……………おつ、吹雪がおさまってきたか。

これでなんとか一息……………エンジン音!?後ろ!T-34駆逐1両!!

……………まだバレてない、だが無線機を使おうとすればバレる距離。

俺とT-34駆逐の距離、およそ30m!!

ガスマスクをつけていたのが仇になったか!音が聞こえづらいのはやはり致命的だ!

だがいい、そこは今は良い。

なぜか知らんが、30m先でエンジンを止めて偵察を始めた、1人が降りて双眼鏡片手に北西の村が見える雪の小山に向かっている。

……………舐めやがって。

「……………やーってやるー、やーってやるー、やーってやるぜ、アカの戦車（搭乗員含む）をボーコボツコに……………」

周囲に他戦車なし、単独偵察か、とことん舐めてやがるな……………よし。

「教育してやる」

跳び上がりラハティを両手にT-34駆逐めがけ走る。

10mを切ったところで勢いそのままに車体後部めがけて倒れこむように伏射の姿勢へ移行、ラハティで後部転輪を狙い撃ち足を止める！

装填よし、発射！

カチツ

バツシューーンツ！！

強烈な乾いた破裂音が鼓膜をつんざくのを感じる、巻き上がった粉雪の向こう側がガラス越しに見える。

ちっ、転輪破壊は無理だったか、だがそこにかかる履帯を破壊できた！

「ちよっ!?何してんの!?!」

音に気づいたT-34駆逐は砲塔を回してくる、残念だが俺はお前の側面真下だぜ。

同じく音に気づいた偵察員が引き返してくる、しかも手ぶらかあいっ、そいつは悪手だ。

「西住直伝（聞いただけ）ー!」

立ち上がりホルスターから引き抜くはコルトM1911、装弾数7発の傑作オートだ。

「ひっ!?いやあー!」

「ちいっ!」

左片手の膝打ちでは狙いが……………くっ!

拳銃にビビって動きが止まった偵察員にダブルタップを2回、当たりにくいと思い4発撃つ。

ちなみに、人に向けて撃つと弾丸は発射されないが、弾頭がついたままブローバックによる排莖と装填を行う、命中判定はレーザー装置がやってくれる。

どういう技術だほんと……。

「あつ……死んじゃった、はあ」

45を4発中3発くらった偵察員（3発目の発射のリズムをミスって4発目は当たらなかった）は死亡判定でリタイア、雪の上にへたり込んだ。

すぐにM1911のマガジンを交換し履帯が破壊されて動けないT-34駆逐の砲塔に飛び乗ってラハティを天板に押し付ける。

搭乗員の配置は事前に西住から聞いている、だいたいの位置にラハティの20mmをぶち込めば、人間であれば即死だろう。

小刻みに車体が揺れる、ちつ、クラツチをめちやくちやに動かしてやがるな。

じゃあまず、操縦者からだ。

「3発ありや十分だな」

砲塔天板からだと言縦者は………だいたいここ、いやもうちよつとこつちか？

そして、引き金を引いた。

パンツ！パパンツ！パンツ！  
ピーーツ

「外に出た装填手の子がやられた……………」

「まだ動かないの!?!」

「ダメです！履帯が切られています！おそらく転輪にもヒビが…………反  
応が鈍いです！」 ガチャガチャ

ガタンツ！ゴンツ！

「……………今のつて、まさか飛び乗られた!?!」

「振り落として！早く！」

「Da！」 ガチャガチャ

ゴンツ…………

「無線手！近くの味方を呼んで！」

「……………」

「何ぼけつとしてんの!?!早く……………」

「……………無線機が壊れてる、おそらくさっきの衝撃でイかれた」

「あ、ああ……………あああああ……………!!」 ガクガク

シャア……………

「ひいつ!?!」

「車長、さっきの転輪を撃った音、たぶんラハティ対戦車ライフルだ  
よ、20mmの大口径ライフルで、T-34の天板じゃ防げない」

「だから今振り落とそうとしてんじゃないの！操縦手早くしなさ

……………」

シャア……………

「ひゅいつ!?!」 ビクツ

「……………どこに人がいるか探してるみたい、ご丁寧に銃口を押し付け  
て」

「いやあ！いやあ！助けて！」

「死ぬわけないじゃないですか、ってかあんなま暴れると痛いっす」

「く、クラツチが、重い……」グツグツ

「出るう！もうここから出るう!!」ジタバタ

「なあんで戦車の主砲は大丈夫なのに拳銃とか機関銃が怖いんですかねこの車長殿は？」

「ちつちやい頃に、押入れにでも、閉じ込められたんじゃ、ないですか？」ガチャガチャ

バツシユーン!!!

ギイシヤアアン!!! (貫通音)

ピーッ

「あ、操縦手ちゃんが………」

「死亡判定………そんな、1発で………」

「あつ、操縦手ちゃんちよつと退いて、死亡判定出たら操作できないから私がやるね」

「うー、お願いします………」

「い、いやだ、出して、出して！ごめんなさい！許してえ！」ジタバタ

「ちよつといい加減うr」

バツシユーン!!!

ギイシヤアアン!!!

ピーッ

「あつ………うちもやられた」

「いやあああああああ!!!」ガタンガタン

ジョーサイド

『いやああああああああ!!!』

「何を騒いでいるんだ………」

死ぬわけでもないのによくもまあそこまで暴れられるものだ。

演技でもなさそうだし、ラハティはもういいか、ステンガンを突きつければ降伏するだろう。

「開けろ！」

ラハティを動かなくなった（おそらく操縦手をやった）T-34 駆逐に立て掛け、ステンガンを構えてガンガンと砲塔を蹴る。

「う、撃たないで！降参！降参します！」

キューポラから身を乗り出してきたプラウダの生徒の顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃであった。

……え？そんな怖かったか？

「今すぐ降りろ！携行武器は置いて行け！」

「わかった！わかったから銃口を向けないで！」

T-34 駆逐から降りてくる車長、操縦手、無線手、そして偵察役だった装填手を両手をあげさせて一列に並ばせる。

「死亡判定が出た者は持つてる武器があれば出せ、死亡判定が出ていない車長はここで自害しろ」

「そ、そんな………」

「……嫌ならさっさと行ってくれ、正直弾が勿体無い」

なんだこれは、俺が悪者みたいじゃないか。

「弾以下の命とは………」

「お前たちの学校じゃそれくらい当たり前前だろ？ほら、銃は2人に一丁ってな」

あの映画は正直かなり楽しめたが、架空のスナイパーをでっち上げてそれも戦果にするあたりがお国柄といふかなんと言うか。

実際はあのレベルの狙撃手が数百人単位でいた、という話のほうが

まだ信憑性がある。

「いや戦争じゃないから、あとうちの車長あんま虐めないであげて、銃とか異様に怖がっちゃう子だから」

「そうなのか?.....それは悪いことしたな」

うーん、抵抗の様子がないからステンガンはしまっていていいか。

「ちよつと待て、確かハンカチが.....」

「(ねえ、なんかいい人っぽくない?イケメンそう)」

「(マスクで顔見えないから何とも、性格は良さそう)」

「あつた、こんなのも良ければ使ってくれ、あと、移動するならそこにあるアエロサンを使うといい」

ハンカチを泣きじやくるT-34駆逐車長に渡しつつ若干雪に埋めて隠したアエロサンを指差す。

「ぐすつ.....」

「すまなかったな怖がらせて、機会があれば何か埋め合わせをする」

「マジっすか?じゃああとでメアドとライン教えてもらっていいっすか?」

「いいぞ、終わったら交換しよう、あとそれから、このT-34はもらってもいいか?」

コンコンツと装甲をノックしつつ聞いてみる、鹵獲ルールは知ってるはずではあるが、まだ車長は生きてるから反対されたら死亡判定を出させて強制鹵獲しなくちゃならない。

「あー、車長?T-34あげてもいいっすか?」

「そ、それは.....その.....」

「嫌なら仕方ない.....目を閉じておけよっ」

ステンガンを腰らへんで構える、狙いは大雑把にT-34駆逐の車長だ。

「あげます!あげますう!!」

「うーん、このへタレ車長」

「へタレかわいいですよ車長オー」

なんだこの.....なんだこの.....うーん?

「.....えー、ってわけで、鹵獲どうぞ」



「あ、ああ、そうする」

正直もうちよつとくらい粘って欲しかった気がする………気分的に。

なんか少し冷めたな………まあいい、続けよう。

アエロサンで被撃破車両とその搭乗員の集合地点に向かった彼女たちを見送ったあと、大洗の校章デカールをT-34駆逐の規定位置に貼り付けた。

ラハティをT-34駆逐の側面上部に括り付け、アエロサンから持って来た武器弾薬爆薬を積み込み、ヒビが入っていたらしい転輪を交換し履帯を繋げ直した。

大洗の校章デカールがなかなかにダサく、T-34駆逐の細い砲身もあり頼りない印象を受ける、色もアエロサンに入ってたペンキで緑色の横線を砲塔と車体に施しているため誤射は無いはずだ。

引っ張って来た無線機で戦車道連盟の審判につなげる。

「戦車道連盟へ、こちら聖グロリアーナ女学院チーム、大洗学園対戦車道部所属ジョージ・カーライル、対戦相手のプラウダ高校のT-34を鹵獲、審査を要請する」

『要請受諾、確認中………異常なし、使用を承認する』

これで、このT-34駆逐は俺のものだ。

操縦席に座り、内部にあった作戦地図らしきものを見ながら北西の村へ直進する。

結構な時間を食ってしまった、転輪がヒビ割れているとは思わなかったから履帯を繋げてから気づいて二度手間になってしまった。

「こちら戦車猟兵、チャーチル以下全車両に告ぐ、T-34中戦車57mm砲搭載型を鹵獲した、緑色で横線が入った、大洗学園の校章デカールを貼り付けてあるT-34は攻撃しないように徹底せよ」

『こ、こちらチャーチル、あの、その………T-34を鹵獲したんですの？』

「ああそうだが………KV重戦車のほうがよかったか？」

向こうのが強いからな。

『い、いえ、最高の戦果ですわ、合流に際してはくれぐれもご注意を、

こちらは『ドオオオオオオン!!』何事ですか!？」

無線を通して響いてきた砲撃音、こいつは40mmの音じゃない、76mm砲の音か!

『こちらマチルダ3号車!KV-1により襲撃を受けています!ちよつと2号車危ん(シユパツ!)被弾、すみません大破しました!』『同じく6号車!KV-1sが出てきました!歯が立ちm(シユパツ!)やられました……』

『8号車、っ!?きゃあ!?(シユパツ!)……くっ、やられました、T-34が来ます!』

『マチルダ全車は撃ち返しながら後退!直接攻撃を受けていないものは近くの車両の後退を援護しなさい!村の中央まで引きずり込んであげなさい!……ペコ、徹甲弾装填、以後の装填は迅速に『はい!』、アツサム、一撃で仕留めなさい『了解!』、ルフナ、相手に弱点を晒さないように『はい!』』

まるで女傑だなダージリンは。

『ここで食い止めれば戦車猟兵さんと私たちが挟み撃ちができますわ………それと、イギリスにはこんな格言がありますわ』

ほう?イギリスの格言とな?

『帆がいちばん高く上がっているのは、風に向かっていている時である。流されている時ではない。』、各車、踏ん張りなさい』

ハハッ!こりゃあいい!最高だなおい!

「イギリスの英傑、ウィンストン・チャーチルの言葉か、いい言葉だダージリン、なら『俺』からも一言送ろう、『不利は一方の側にだけあるものではない。』」

今は不利であろう、立て続けに3両もマチルダがやられた、事態は最悪と言っている。

それが現在進行形で襲いかかって来ている、波に乗ったプラウダの攻撃を受け止めることは、ビックウエーブの前に立ちはだかるが如く無謀と言えよう。

しかし、不利は一方だけにあるわけではない、戦いとは、人生とはそういうものだ。

『ふふ、そうですね、ジョージさん』

「3分、いや2分耐えてくれたなら、俺も攻撃に参加できる、あと少し耐えてくれ」

『皆さん聴きましたわね？ 私たちの「グロリアーナ（栄光ある女人）」をお見せする時ですわ』

ダージリンの鼓舞でモチベーションは高く維持されているが、性能差は歴然だ。

一刻も早く北西の村で劣勢を強いられる聖グロリアーナ女学院の援軍に着かなければならない、なのにこのT-34駆逐はなかなかどうして速度が出ない。

操縦手を死亡判定にするまでの間かなり車体を揺すぶっていたからどこかイかれたのか？ クソツ、クラッチは重いし曲がらないし視界も悪いし搭載されている無線機は死んでるし……何が傑作中戦車だ！ この「ピーーーーーーッ」!!!

イかれた社会主義の豚め！ III号戦車とIV号戦車とM4中戦車の産みの親に土下座しやがれ！

というか……………。

「こんなクソ重クラッチ戦車なんぞ作りおって！ やる気あんのかスターオン！」

はあ……………はあ……………ふう……………スッキリした。

スッキリしたところで状況の整理だ、まず相手は正面と右と左の、大雑把に三方向から同時に攻めて来ている。

勢いそのままに3両のマチルダが沈黙、叫んでるときに入っていたらしい通信によるとさらに2両落とされて残りは5両。

だがただやられるだけでなく、T-34-76を1両仕留めていたようだ、でかした！

これで残りはKV-1とKV-1sが2両ずつ、T-34-76が2両とT-34駆逐が1両だ。

幸いにも今乗っているT-34駆逐ならKV重戦車だろうがT-34だろうが抜ける貫通力を持っている、だが致命的なのがこいつの乗員が俺だけということだ。

戦車砲用の重い砲弾を装填して照準、発射しつつ走行するなんて無理だ。

だから、少々惜しいがこいつに乗って突っ込んで1発撃ったら乗り捨てて爆薬で戦おう、今の1人ではそれしかできない。

だがそれで充分だ、西住の言った通りの戦法と、市街地という好条件で負けるはずがない。

「待ってる、イワンども」

ふと、ボーイズ対戦車ライフルに付けたボコストラップが揺れるのが見えた、これから起こることを想像して楽しそうに笑い転げているようだった。

「ボコボコにされるのは俺の方かもしれんが」

相変わらずろくに加速しないポンコツ戦車の内部で蹴りを入れつつ、北西の村へと急いだ。

チャーチルVII side

キュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラ  
ラキュラキュラキュラキュラキュラ………

「……………」

キュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラキュ  
ラキュラキュラ………

「9時方向、KV-1、狙いなさい」

「はい」

ウイイイイン……………カシヤン

「fire」

「fire」

ドゴオン!!!

《プラウダ高校、KV―1走行不能!》

「いい狙いですわアツサム、これで残り6両ですわ」

「砲塔基部に直撃です、さすがですアツサム姉様」

「ありがとう、ペコ、次も徹甲弾でお願い」

「はい!」

カコン、ガシヤツ……………コンツ!

「装填完了!」

「……………3時方向、T―34」

「はい」

ウイイイイン……………カシヤン

ドオン!

カアコオオオオオンツツ!!

「T―34―76の76mm砲では、正面は抜けませんわ……………f

ire」

「fire!」

ドゴオン!

《プラウダ高校、T―34―76、走行不能!》

「これで残りはKV重戦車だけです、でも油断しないように」

「こちらは正面なら抜かれませんが、KV重戦車相手では照準を誤れば弾かれてしまいますわね」

「ええ、でも私はあなたの腕を高く評価していますのよ?アツサム」

「嬉しいことですよ……………ペコ、紅茶のお代わりをいただけるかしら?」

「はい、少しお待ちくださいませ」

「僚車の状態はどうですか?」

「はい……………南側の7号車と後方の10号車が健在、それ以外は

「……………大破です」

「……………思わしくありませんわね、お相手さんはKV重戦車が3両、こちらは戦車猟兵さんのT-34-57を含め4両ですが、現状では実質3両」

「弱点を見せる気はありませんが、KV重戦車相手ではマチルダでの時間稼ぎは逆効果でしょう」

「打って出ることが出来るほど、私たちもマチルダも早くありません」

「……………ここは戦車猟兵さんの到着を待ちましょう」

「7号車より通信、残りのKV重戦車は村の入り口で終結しつつある模様」

「……………お相手さんはT-34-57を鹵獲されたことを知らないはず……………戦車猟兵さんに無線を」

「はい！」

「こちらチャール、現在私たちはチャールとマチルダで3両、お相手さんはKV重戦車3両でにらみ合っています、状況を打破するためにお力を貸してもらっても？」

『こちら戦車猟兵、もちろん、俺の頼りない腕で良ければ』

「謙遜なさらなくてくださいまし、あなたは私のチームの次に頼れる腕ですわ」

『過大評価で縮み上がりそうだ……………それで、どのような策を？』

「ジョージさんにはT-34-57で敵中に突撃して欲しいのですわ」

『囧か……………よし、わかった』

「嫌な役を押し付けてしまって申し訳がないのですが、お願いしますわ」

「嫌な役？おいおいそれはジョークか？……………帆がもつともたかい場所が上がっているのはどんな時だ？」

「あら……………うふふ、うまく返されてしまいましたわね」

『ははは、俺は囧、そっちは攻撃……………しっかり頼むぞ』

「ええ、私のチームが、私のチャールの砲手が、確実に撃破しますわ」

『頼もしい限りだ、よし、ダージリンのチームを信じる……………今か

ら突っ込むぞー！あとは頼むー！アウト！」

「アウ………もうきれていますわね………全車前進準備、村を抜けて雪原に出ますわ」

『はいー』』

「アッサム、行進間射撃でKV重戦車の撃破は可能ですわね？」

「100%確実に撃破して見せますわ」

「ペコ、まさかさっきの装填が最速とは言いませんわよね？」

「!………先の装填より、0.5秒縮めてみせます！」

「ルフナ、お相手さん方に、聖グロリアーナの走りを見せて差し上げなさい」

「華麗な走りをお見せしますわ」

「皆さん、友軍T-34がお相手さん方を混乱させますわ、この期に我々は村を出て撃破します、戦車前進、打って出ますわよ」

ブオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

ジョージside

「あの丘を越えれば………よしーってKV-1にKV-1s!?村の入り口の邪魔なところに！」

だが気づかれていない！一気に距離を詰めて………ここだ！停

車！

ギャギャンツッ！

落ち着け、落ち着いて砲塔に移れ。

そうだ、AP弾は……こいつか、装填……よし。

カシャツ……コンツッ！

良い音になるんだな、お次は照準だが……ええいまどろっこしい上に見にくい！

とりあえず十字のところをKV-1sの砲塔背面に合わせておいて……おっと、少しずれ……ぐっ!?こつちに砲塔が指向中!?

「くそっ！当たれ!!」

バムツツ!!

ギツシヤアンツツツ!!

シユパツッ！

《プラウダ高校、KV-1s、走行不能!》

「よし！KV-1sをやった!!」

車体後部の下部に運良く突き刺さった57mm砲弾は、そのままエンジンルームを貫通撃破！

戦車に搭乗しての初撃破をもらえるとは、プラウダも優しいものだ。

ドオン！

ギツシヤアンツツツ!!

「グアッ……ちくしょう、やられた!」

俺の乗っているT-34駆逐はKV-1sの撃破に気づいた近くのKV-1に撃ち抜かれ撃破された。

「だがまだ終わっちゃいない!」

幸いにも横向きに停車していたのもあり、やられたのはエンジン周りで、俺のダメージは軽傷、つまり試合続行可能ということ！

すぐさまT-34駆逐から飛び降り、括り付けたラハティを外……そうとするがKV-1が照準してきたから回避!!

雪の上を転がってT-34駆逐の陰に隠れる。

KV-1とKV-1sの位置を確認し、最後の収束手榴弾を取り出



してKV―1に向けて投げる。

「ソオイ!!!」

と同時に、KV―1めがけ突撃する。

狙い通り、KV―1は榴弾による破片効果で俺を倒そうと撃ってきたが、直前に投げた収束手榴弾の爆発によるブレによって砲身があらぬ方向を向き、榴弾はかなたにすっ飛んだ。

KV―1にまわりつくと、KV―1の砲塔を盾にKV―1sの履帯をボーイズ対戦車ライフルで狙い撃つ。

バアンツ!

ちっ、こんな時に外すか俺!

次弾………ダメだ!間に合わん!

ボンツ!

ガアンツ!!

ドオン!

ヒュツ………

い、今の砲撃、KV―1sの砲身にピンポイントで当てて狙いを数ミリずらした………のか?

村の方を見るとマチルダがその40mm砲から煙を出していた、どうやら撃つたのはあのマチルダのようだ。

「とんでもないマチルダがいたもんだ………つて動くなKV!」

砲塔がマチルダを指向しようと旋回を始める、マチルダは後退するがその鈍足では隠れる前にやられる!

だがもう爆薬はない!KV―1だけでなくKV―1sまでもマチルダを指向し始めた!

どうすれば………ええい!ダージリン!よく見ておけ!

「戦車猟兵の仕事は徹底的な妨害なんだ!」

ボーイズ対戦車ライフルを構える、狙うはKV―1の砲塔、そのペリスコープ、さらに言えば砲手用のペリスコープだ!

13・9mmに耐えられるか!?

「喰らえ!」

バアンツ!

パリンツ!

KV―1にはふたつあったな、もうひとつ!

カシャツ!コオンツ!

バアンツ!

パリンツ!

「これで狙えまい……………このままKV―1sのペリスコープも……………」

なっ!?もうマチルダが照準されてしまっている!?だがボーイズで……………」

バアンツ!

スウン……………」

1mmも掠らないですっ飛んでいく13.9mm弾……………」  
スウウ……………」

「ここで外すかちくしょう!」

カシャツ!コンツ!

次弾……………間に合わん!

ブオオオオオオオオオンツツツ!!!

こ、この非力なベドフォード ツイン・シックスガソリンエンジンの音は!

チャーチルVII!

ドオン!

キイイイインツ!

『KV―1sの76mmではお昼休みの側面は抜けなくてよ』

「マチルダの前に側面を晒してまで出てきやがった……………」

なんつうイケメンだよダーズリン……………淑女の嗜みっていうのは半端じゃあないな。

つとお、ぼけつとしてる場合じゃねえ!KV―1がチャーチルVIIに突っ込んでいきやがる!

「とあつー!」

このままじゃ巻き添えもいとこだ、すぐに飛び降りる、KV―1はそのままチャーチルVIIに向かっていく。

ドオン!

撃った!?まz

カアアアアアンツ!

しよ、正面!?超信地で側面を隠して正面を向けたのか!?2、3秒あるかないかの時間で、そんな早技を……。

『ゼロ距離であっても、チャーチルの正面は貫通を許しませんわ』

『Fire!』

ドゴオン!

《プラウダ高校、KV-1s、走行不能!》

ゼロ距離とはいええ、照準と砲身の誤差がある中でターレットリングをあんな簡単に……………。

「かつこよすぎて惚れるじゃないか!」

爆薬はもうないが、とっておきがひとつある!

「たらふく飲みな!」

空中に酒瓶を放り投げる、中身は高濃度のアルコールで防水加工済みの布が栓になった火炎瓶。

モロトフのカクテル、とも言うやつだ。

ボーイズのマガジンを外し、込めてあった徹甲弾を取り出し、曳光弾を装填する。

ガシャン!

火炎瓶がKV-1の上に落下し、瓶が割れて中身がエンジン上部に広がる。

「燃えろ!」

バアン!

「うぐっ!?!」

くそ、姿勢が悪いせいで肩が……。

だが、弾丸は真つ直ぐに飛んだようだ。

13.9mmの曳光弾がKV-1の車体後部に着脱する。

瞬間、高濃度のアルコールを含む液体が激しく燃え上がり、瞬く間にエンジンから黒煙が上がり出す。

ペリスコープを破壊され周囲の確認もできないKV-1は突如工

ンジンがダメージを受けたことに混乱でもしたのか、バックギアを入れて下がろうとした。

「まだ動くか!？」

なんて頑丈なエンジンなんだ！燃えてるんだぞ!?こんなことがあるのか!？」

しかしすぐに動きが止まり、白旗が上がった。

《プラウダ高校、KV-1、エンジン破損炎上判定により走行不能!》  
《試合終了、聖グロリアーナ女学院戦車道、大洗学園対戦車道連合の勝利!》

「お、終わったか」

し、心臓に悪いぞ最後のは……………。

しかし、苦しい中で価値をつかむこの感覚……………。

「あー……………最高だ」

雪の上に倒れて寝転がって空を見る、試合開始の時とは打って変わって星が見える。

右肩の痛みさえ忘れてしまいそうなほどの勝利の余韻、久しぶりだ……………。

視線をずらすとボーイズにつけたベトナムちつくなボコが目に入る。

はは、どうだ西住、お前の作戦で勝ってやったぞ！まさしく軍神のごとき的確な読みだった！

「ははは、まるで勝利の女神だな」

おっとりしておどおどした勝利の女神か……………はっ！最高かよ、嫁に來いやマジで。

「ジョージさん？大丈夫ですか?」

西住のことを考えていたら女傑が膝を折って俺の顔を覗き込んでいた。

「あー……………すまない、初めての模擬戦で気持ちの良い勝ち方ができたものでな……………」

「共感できますわ、私も一年生の頃、学内の模擬戦で隊長を務め勝利できた時、あなたのように満たされた感覚がありましたわ」

「一年生のダーズリンか……見たいものだな」

「あら？今の私よりも若い方が好みですね？」

「美しいものに時間なんて関係ないさ、俺にしてみれば絶世の美女も老人も、どちらも美しいものさ」

長い時間を生きて老いた存在であれ、その人間の輝かしさや美しさは失われないのだ。

「良い言葉を聞かせていただきましたわ、それとジョージさん」

「なにかな？」

「集合がかかっていますので、起きて下さいますこと？」

「おっと、レディを待たせるのはいかな」

跳ねるように飛び起き、体についた雪を手で払うと、膝を曲げた屈伸の状態から立ち上がったダーズリンと目が合う。

「それでは、マスクを外して下さいますわよね？」

「そういえばそんなことも言ったか……ああ、今外すよ」

顔面の防御のためにつけていたガスマスクを外す。

ふうふう……やはり汗臭いな、帰ったらよく洗わないとな、つて汗を自覚すると体が冷えてきた!?

寒い寒い!……つて。

「ダーズリン？何か顔についているか？」

「……………」

「あ、汗臭いのは我慢してほしい、ちょっと動き回ったせいで……」

「……………イケメン、いえ、中性的で可愛いお顔ですね」

「人の気にしてるところを躊躇ないな!？」

「私は好みですよ？」

「光栄だが可愛いというのはちよつとな……」

まさか、この後ほかの戦車の搭乗員やプラウダのやつらにもそう言われるのだろうか？

まあ、言わせておいてやるか、それよりもこの後西住をどうからかってやろうか？

ボコの格好をした西住の自撮りでも送ってもらおうか？

……………考えといてアレだが、ただの変態だな。

それも衣装まで準備している筋金入りの変態みたいだな。  
……………興味はあるけどな。